

日本語と韓国語における敬語の意味・機能に関する研究

著者	谷後 貞美
学位名	博士(文学)
学位授与番号	24501甲第47号
学位授与年月日	2014-09-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001688/



論文名：日本語と韓国語における敬語の意味・機能に関する研究

谷後（鄭） 貞美

<論文内容の要旨>

本研究は、日本語と韓国語の敬語に関する研究成果を踏まえ、両語の形態的類似性の中で助詞・用言・人称詞における相違点や特徴、そしてそれぞれの言語の美化語に関して名詞レベルで追究を行っている。具体的には、助詞・用言・人称詞・美化語が語用論、つまり対話の中でどのように用いられているのかに着目して、本研究での観点や意義を明確にし、論を進めている。

本研究の構成は、第1章序論、第I部（第2章、第3章、第4章、第5章）、第II部（第6章、第7章、第8章、第9章）、第10章結論からなっている。

第1章の序論では、本研究の目的、視点、研究方法、敬語や美化語の定義、構成、そして本論を大きく第I部と第II部に分けて示している。つまり、第I部では敬語の中でも尊敬語・丁寧語・謙讓語、そして第II部では敬語の美化語について追究している。

本研究の内容に関する詳細を、さらに具体的に示すと、次の通りである。

第1章の序論では、本研究が追究している内容に関する目的・視点（日韓敬語の類似点にみる相違点）・日韓敬語の分類・分析方法・構成を示している。つまり、日本語と韓国語の敬語は用いられる場面によって、その意味合いが変わってくるため、語用論の観点に立って敬語の特徴を踏まえながら、その意味機能を考察している。ことに、「話し手」や「聞き手」の上下関係、これらと話題との関係などが複雑に絡んでくる。この諸事情を考慮しつつ、場面を網羅して日本語と韓国語の形態的類似性の中で敬語の助詞・用言・人称詞、美化語の名詞が対話の中でどのように用いられているのかに着目している。本研究の問題関心に沿って、日本語と韓国語の敬語に関する先行研究の成果を整理して、明確にすべき課題を提示している。

第I部「韓国語と日本語の助詞・用言・人称詞や呼称における敬語の意味機能」の第2～5章では、韓国語と日本語の助詞、用言、人称詞における敬語の意味機能について分析をしている。

第2章「日本語と韓国語の敬語の概要及び先行研究」では、韓国語と日本語に関わる敬語、その中でも助詞・用言・人称詞や呼称における敬語の意味機能に関する概要及び先行研究について整理を行っている。つまり、本研究の問題関心に沿って、日本語と韓国語の敬語に関する問題関心に沿って、とりわけ用言・助詞・人称詞や呼称レベルにおける概要を示し、その先行研究の成果を踏まえている。

日本語と韓国語は類似点があり、敬語の分類に関しても多少の相違はあるが、敬語の枠組みはほぼ同じである。しかし、類似性における相違点のある領域、つまり相互の言語では発達していない分野の研究は薄い。日本語の「尊敬助詞」、「一烈一gess」と言った補助語幹について、日本における研究は少ない。一方、これらについて韓国では、厚い先行研究を有している。

さらに、日韓の人称詞や呼称に関しては、両国ともに研究が進んでいる動向からわかるように、敬語の領域における研究のばらつきはあるが、日韓言語の類似点を活かして、対照研究を行う重要性も指摘している。

第3章「韓国語と日本語の敬語助詞—主体（主語）助詞を中心に—」では、日本の相対敬語や韓国の絶対敬語における同じ状況のもと、語用論の観点に基づいて「-ㄱ-kke」や「-に」の付く敬語助詞の全般を提示しつつ、ことに日韓の主体（主語）の「敬語助詞」はどんな主体と結合をするのか、対話の中でどのように用いられるのか対照分析を行っている。つまり、韓国語と日本語にはともに敬語が発達しているが、助詞に関しては多少の相違が見られる。そこで、両語の「敬語助詞」を比較し、主体を中心にどんな環境や談話の状況で敬語助詞を用いるのか、その日韓の類似点と相違点について追究している。

両言語の「敬語助詞」における韓国語は「-ㄱ-kke」、日本語は「-に」に他の助詞を加え、「-ㄱ-kke」は与格の敬語助詞である反面、「-に」は一般助詞である。ことに、主格の敬語助詞だけを比較してみると、韓国語は主体・与格・所有格に渡っている反面、主に日本語は主体に留まっている傾向が強い。

そして、韓国語は尊敬の属性を持つ主体や談話における状況、つまり「話し手」と「聞き手」の上下関係及び話題によって幅広く、その敬語助詞の使い方が決まる。一方、日本語は手紙、非対面や多少の物理的距離感のある場合に使われる。なお、主体の敬語助詞は、韓国語は口語体、日本語は文語体に用いられる傾向にもある。

しかし、これらの助詞は敬語の使用が崩れていく傾向の中、その使い方が正確さを欠いている。もうひとつ、韓国語と日本語の言語の特徴から対面対話における助詞は省かれる習性が強いため、敬語助詞は口語体より文語体に強く残る傾向をたどっている。

第4章「韓国語の「-ㄷ-geess」に関する意味機能の考察—敬語に付くケースを中心に—」では、韓国語の用言に使われる「-ㄷ-geess」について対話の中における意味機能を敬語と関連づけて考察している。つまり、対話における「話し手」と「聞き手」の関係は、2人称主語だけではなく、1人称主語、さらに3人称主語の対話に使われる「-ㄷ-geess」まで分析範囲を広げ、1人称主語、2人称主語、3人称主語の発話の順に分析している。

まず、「話し手」（1人称）が1人称主語、つまり「話し手」自身の話を「聞き手」（2人称）にする時、「謙讓用言」に「-ㄷ-geess」を加えた場合、謙讓をさらに強める「強化機能」が見られ、この「-ㄷ-geess」は「極謙讓」としている。

次に、「話し手」が2人称（聞き手）を主語にして発話する時、「尊敬用言」・「一般用言+(-시-si)」に「-ㄷ-geess」を付けると、「-ㄷ-geess」は「尊敬用言」や一般用言の尊敬の度合いを強める「強化機能」があり、その意味機能は「極尊敬」と名付ける。

最後に、「話し手」（1人称）が「聞き手」（2人称）に対し、3人称主語の話題を発話する際、3人称主語が同席している場合の「尊敬用言」・「一般用言+(-시-si)」に「-ㄷ-geess」を付けたら尊敬を一層強める「強化機能」が見られ、一方、同席していないケースにおける3人称主語の「-ㄷ-geess」は、推測・推量の意味機能しかない。特に、「-

烈-gess」が平叙文の過去形と結合した場合は推測の度合いが強く、疑問文では反語のニュアンスがある。

第5章「日韓における人称詞・呼称の「あなた」と「当身」—等称・下称・敬称を含む多義性の考察—」では、日韓の人称詞・呼称である「あなた：貴方」と「当身：dangsin」について、文脈における意味合いを含む多義性を中心に用言の共起を踏まえて対照考察を行っている。つまり、架空の小説、ドラマ、そして文語体の分析ではなく、実際の生活で使われる対面会話を中心に、「等称(Formal)」・「下称(Informal)」・「敬称(Respect)」の3つに分類して分析している。

そこで、まず「等称」の2人称詞・呼称として用いられる「あなた」と「当身」には、日韓ともに、主として中年の人々が使う傾向にあるという共通点が見られた。ことに、家庭で使われる「あなた」は、主に妻（女性）が夫に用いることに対し、「当身」は夫婦の相互が使う。さらに、韓国語における「等称」の「当身」は日本語に比べて使用される範囲が狭い。また、「あなた」と「当身」に共起する用言は、概ねぞんざいな言い方が自然であるが、愛情が込められている。逆に「聞き手」が多数の場合は丁寧な用言を用いる。

次に「下称」としての「あなた」と「当身」は、日韓で類似している人称詞である。主に、相手を責めたり、叱責する場面で用いられることが多く、けなす意味合いが強い。上下・力関係によって上位の者が用いる傾向にあるが、日韓で異なる点は、日本では親が子供を叱るときに、「あなた」を用いるが、韓国では同じ場面でも子供に「当身」は使わない。共起用言としては「等称」と同様、主にぞんざいなものを用いるが、けなしたり憎んだりする意味で使っている。力関係によって叱責される対象が年上の場合や品位を考慮する際には、多少の丁寧な用言を用いることもある。

最後に、「敬称」の「あなた」と「当身」においても、日韓には多少の差が見られる。日韓ではやや対照的で、日本語の「あなた」はほとんどが2人称詞・呼称が敬称である反面、韓国語では2人称詞・呼称に加えて、3人称やその呼称が敬称としても「当身」を用いる。つまり、日本語の「あなた」よりも韓国語の「当身」の用途のほうが幅広い。その共起用言は敬称であるだけに丁寧な言い方が自然である。ことに神に対しては尊敬の念を抱いた最高レベルの最敬の用言を用いる。

第Ⅱ部「日本語と韓国語における美化語の意味機能」の第6～9章では、日本語と韓国語にまたがる会話の中における名詞を中心とする美化語に論点を据えて展開する。

第6章「美化語の先行研究とその定義」では、美化語を敬語の範疇に入れるかどうかの議論をしつつも、その定義が明確にできていない。そこで、尊敬語・謙譲語・丁寧語と美化語を照らし合わせつつ、対話の中で「話し手」と「聞き手」の関係における使い方やそれぞれの特徴を示し、美化語とは何かを明確に示す。つまり元来、名詞レベルの美化語は、一般的に「お／ご」を付けて具現化する。その美化語には、「ご」の付くものもあるが、「お」の付くものが圧倒的に多い。そして、美化語の使用主体は女性が多いが、個人差も大きく、言語生活歴も関わっている。

ところで、「話し手」や「聞き手」の対話における美化語の特徴から、美化語とは使うと「品格」が漂い、「話し手」や「聞き手」の地位や上下関係に関係なく両者が使える「双方向性」があり、用いないからと言って非難される可能性も低い「任意性」に満ちた、そして弱いわきまへの水準に留まっている言葉であると定義している。この「わきまえ」というのは、使わないと行けない、つまり非難されたりする可能性の高い言葉づかいに関して、非難されないよう適切に使う、そして「話し手」が自分の品も念頭に入れたことを前提にした意味である。つまり、わきまえは相手を意識することであり、自分の品をアピールする意識でもある。対話の中で「話し手」や「聞き手」の用いる美化語は丁寧語と共通する部分もあり、これは美化語が丁寧語から生まれて派生した敬語という属性も強く表れる。

第7章「日本語における接頭辞「御：ミ」の付く語彙について—「ミ」の派生の諸側面—」では、日本語における接頭辞「御：ミ」の付く語彙に関する使い方を分析しつつ、この「ミ」と深く関わっている「オン」・「ギョ」、さらには必要に応じて「ゴ」・「オ」まで含めて、「ミ」の機能変化について追究している。ことに、文禄期の『吉利支丹教義』における「ミ」の用例、今日における「神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するものに付ける接頭辞」という基準に基づいて、天皇家・神仏・公家／貴人、キリスト（カトリック）教に分けて接頭辞「ミ」の付け方や意味合いを考察している。

天皇家や公家・貴族に付ける接頭辞「ミ」は固有名詞化、あるいはあまり用いず死語化する反面、神仏やキリスト教などの宗教の場では、今も相変わらず用いられている。今日の天皇家には敬語の意味で、「ミ」ではなく主に接頭辞の「ゴ」や「オ」を付けている。

一般的に、「ミ」は「神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するもの」に付ける接頭辞と見なされてきた。この天皇家や公家・貴族に付ける「ミ」は固有名詞化、あるいはあまり用いず死語化する反面、神仏やキリスト（カトリック）教などの宗教の場では、今も相変わらず用いられている。今日の天皇家には敬語の意味で、主に接頭辞の「ゴ」や「オ」を付けている。この「ゴ」や「オ」は社会全般、つまり一般人の使う語彙にまで広がっている。「ギョ」は「ミ」とほぼ同じく用いておらず、今日は固有名詞化している傾向が強い。

尊敬を表す接頭辞の「ミ」は「ゴ」よりその程度が高く、さらに「オン」よりも敬う意味合いが強い。敬う意味の「オン」は、今日の生活の中でも用いる語彙が多く、御礼（オンレイ）、御中（オンチュウ）はその事例である。さらに、接頭辞の「ミ」は敬う意味合いだけではなく、異なる機能の変化を見せている。

接頭辞「御：ミ」は尊敬語の意味であるが、その語頭にさらに「御：オ」を付けることによって「御：ミ」の付いた語彙に機能変化が起こる、つまり尊敬語から美化語化しており、そこで尊敬語から美化語へ機能の変化が確認できる。

第8章「韓国語に見られる美化語の要素—「말씀 malsseum」と「藥酒 yagjju」を中心に—」では、美化語が非常に発達している日本語の美化語の基準に照らし合わせ、韓国語における美化語の存在を対話の中から見つけ出し、その美化語の特徴について分析している。そこで、日本語における美化語の条件や基準、「話し手」や「聞き手」における「品格」

や「双方向性」の有無に照らし合わせて、韓国語における「말씀 malseum」と「薬酒」を中心に考察を行っている。

日本語の美化語には品が漂うが、韓国語の「말씀 malseum」と「薬酒」にもそれと類似する「教養」を感じさせている側面がある。なお、「말씀 malseum」と「薬酒」は「話し手」や「聞き手」の間で互いに使う双方向性がある。しかし、その使い方には「話し手」や「聞き手」の目上や目下関係、話題の関係、世代間の差が複雑に関わっており、これは矢印の太さ（使用頻度）として表れている。つまり、日本語の美化語でみる「話し手」や「聞き手」における対等な双方向の使い方とは異なり、韓国語の「말씀 malseum」や「薬酒」の双方向性を示しているが、この偏りが矢印の太さのアンバランスとして表れる。

この「말씀 malseum」や「薬酒」に双方向のアンバランスはあるものの、日本語における美化語のもう一つの基準である「品格」、つまり「教養」が感じられる側面は一致している。というわけで、「말씀」や「薬酒」は日本語における美化語の要のところがほぼ合致しており、「美化語の要素」が存在する。

第9章「日本語の乳幼児期にみる美化語」では、日本語の乳幼児期に使われる接頭辞「お」付けの美化語を取りあげて、乳幼児の成長段階を細分化し、それぞれの段階で用いられる美化語にはどんな語彙があつて、その特徴は何か、それに反復性の言葉「乳幼児語」との関わりも加えて追究している。

従来の研究では、幼児語は乳児期や幼児期に使われる言葉を引くくめて一つの時期に束ねて、さらにこの時期に使われる子供の美化語に関しては研究を行ってきていない。ここでは子供の発達段階を細分化して「乳児期」における美化語の「乳児語」や「幼児期」における美化語の「乳児語」に区別し、この「乳児期」や「幼児期」にまたがる反復性言葉の「乳幼児語」も加えている。この「乳児語」は母親が主導して、ほぼ一方的に子供に語りかける会話である。そこで、母親は言葉駆使の主體的役割を果たしており、その意味で「婦人語」・「母親語」とも言える。「乳児語」の特徴は、子供自身の身の回りに関わる語彙が中心で3モーラのリズム感があり、多少の反復性も認められる。

次いで乳児期においても子供が片言を駆使できる頃になると、「乳幼児語」を用いるようになるが、その語彙には反復性が強く、4モーラのリズム感が漂う。この「乳幼児語」は、母親以外に周りの人々も子供に用いる。

これらの「乳児語」や「乳幼児語」は、保育所や幼稚園に通い出すと、使わない断絶性を見せる。「乳児語」と「幼児語」の間には断絶性があり、「乳児語」は大人の美化語へ移行しない。しかし、ごく一部の「幼児語」は大人の美化語としても用いられる。「幼児語」は保育所や幼稚園で用いる言葉で、子供にとって生活の領域が広がっていることを示し、施設の先生が主体となって使う。その意味で「先生語」とも言われる。そして、「乳児語」や「幼児語」に「ご」付けの美化語は見あたらない。このいずれの美化語も双方向性はあるが、大人の美化語にみる品や品格も完全に否定はできないものの、それよりは「優しさ」・「柔らかさ」・「幼さ」・「幼稚さ」が目立つ言葉である。

これらの「乳児語」・「乳幼児語」・「幼児語」は「児童期」を向かう前には用いなくなる。

つまり、「乳児語」・「乳幼児語」・「幼児語」はそれぞれ断絶性を見せながら児童語、ひいては大人の言葉に移行していくのである。ことに、「乳児語」や「幼児語」は大人の美化語に継承されず、2回に亘って断絶、つまり非連続性を見せている。

第10章の結論では、第2～9章の考察で得られた成果をまとめている。日韓の敬語の概要や特徴について踏まえつつ、「敬語助詞」は韓国語ではよく主格の口語体を中心に、日本語は軽微で文語体を中心に使われている。そして、韓国語の「-ㄹ-geŋŋ」は「尊敬用言」や一般用言の尊敬の度合いを強める「強化機能」がある。なお、日韓の2人称詞・呼称である「あなた」と「当身」は類似点を持ちながらも差がること、従来曖昧であった美化語の定義を正確に行っていること、尊敬の接頭辞「ミ」の一部が美化語の「オ」に意味機能を変化していること、韓国語の「말씀 malsseum」や「藥酒」の美化語的要素が存在すること、子供の「乳児期」や「幼児期」に美化語を用いていることを明確にしている。

以上、本研究では韓国語と日本語における助詞・用言・人称詞や呼称における敬語の意味機能、そして名詞を中心とする両語の尊敬語と美化語の機能変化や使い方について新たな見解を示している。